

## 小中学校教員の環境認識と森林体験への志向に関する研究

山本清龍・鴨田重裕・渡邊良広・村瀬一隆・辻 良子 (東大農)

要旨：学習指導要領が適用される学校では、総合的な学習の時間等を活用することによって森林を含めた自然空間において体験の機会を設けられるようになった。しかし、実際には地域の環境を活用することなく、あるいは近隣の教育研究機関等と連携することなく教室や校内で体験を提供する事例は多い。そこで、小中学校が学校外における自然体験を促進するための方策について検討することが必要との視点に立ち、1) 小中学校教員の環境認識、森林体験への志向について把握、整理すること、2) 環境認識と森林体験への志向との関係性を把握し、森林体験の提供方法に関する今後のあり方について論じること、の二点を目的とした。その結果、森林体験への参加を促進していくためには、地域の自然環境への関心など環境認識を深めていくことや、森林の教育研究機関の取り組みを広報していくことの重要性が示唆された。

キーワード：小中学校、教員、環境認識、森林体験、志向

## I はじめに

2000年に開始された総合的な学習の時間を利用することによって、学習指導要領が適用される学校では森林を含めた自然空間においてかつてよりも質の高い、豊富な時間量の体験の機会を設けられるようになった。しかし、実際には地域の環境を活用することなく、あるいは近隣の教育研究機関等と連携することなく、教室や構内で教育内容が完結してしまう事例が多い。もちろん、地域との連携なく学校が授業内容を単独で企画し実践すること自体は尊重されるべきであるが、一方で、総合的な学習の時間が設置された当初の意図として「学校」「家庭」「地域」の連携が掲げられており、学校の支援要請に対して即応できるよう地域が準備しておくことも重要である。そこで、本研究では、南伊豆町を事例として、小中学校が学校外における自然体験を促進するための方策について検討することを企図した。具体的には、1) 小中学校教員の環境認識、森林体験への志向について把握、整理すること、2) 環境認識と森林体験への志向との関係性を把握し、森林体験の提供方法に関する今後のあり方について論じること、の二点を目的とした。

地域連携の観点から教育研究機関が学校へ提供する森林体験について論じたものはきわめて少なく、社会貢献の一環としての大学による小学校への森林学習の支援に関する知見(1)がある程度であり、その成果として教員養成にむけて学生自身の森林体験学習が重要と結論づけられている。本研究は、教員養成を必ずしも意図しておらず、教員を含めて地域が共有すべき意識や取り組みが何かを明らかにしようとする点が特徴である。

## II 研究方法

1. 調査地および調査方法 既に触れたように調査地は温暖な気候、美しい海岸線を持つ観光地として知られる南伊豆町とした。南伊豆町は、観光振興に関わる産業からの要請によって景観を中心として地域住民が環境認識を深める取り組みを既に始めている自治体である(2)。2007年6月に同町にある5つの小学校および2つの中学校において、すべての教員むけにアンケート調査票を配布し、同年の1学期末にあたる7月下旬に回収した。

2. 調査票の構成 調査票は、まず、年齢や性別、担当する学年といった基本的な属性を問う項目を設けた。また、環境認識に関わる質問として、地域の自然環境に対する関心、危機感、役割感・責任感(3)に関する項目、学校における自然学習や課外活動の時間、子どもたちの自然遊び(図-1)に関する項目を設けた。その上で、同町内にある東京大学樹芸研究所が実施する森林体験プログラムへの参加経験と参加意向、同プログラムへの期待(自由回答)、不参加の意向の理由(自由回答)について回答を求めた。

## III 結果

1. 属性 回答者の属性は表-1の通りとなった。40代が最も多く約3分の1を占め男性が女性よりもやや多かった。また、調査を依頼した学校教員が協力的であったこともあり、担当学年に顕著な偏りは生じなかった。

2. 環境認識と森林体験への参加意向 南伊豆町の自然環境や子どもたちが置かれている社会環境に対する認識が、学校教員の森林体験への参加意向に影響を及ぼしていると考えられることから、学校教員の環境認識につい

Kiyotatsu YAMAMOTO, Shigehiro KAMODA, Yoshihiro WATANABE, Kazutaka MURASE and Ryoko TSUJI (Tokyo University Forests, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo, Minami-Izu, Shizuoka 415-0304)

Environmental cognition and aspiration for forest experience of teachers of elementary schools and junior high schools.

て把握、整理を行った(表-2)。まず、南伊豆町の自然環境については、やや関心がある人が最も多く6割を占め、かなり関心があるという回答者を併せると98%にのぼった。また、自然環境が荒れているか否かという問いに対してはやや荒れているという人が最も多く6割いる一方で、約3割はあまり荒れていないと思っていることが明らかとなった。さらに、南伊豆町の自然環境を守っていくための役割や責任については、同様に8割を超える教員が自分にもあると回答した。学校における地域の自然の学習時間については、約半数の回答者が増やしたいと考えているものの、約3割はこのままでよいと回答した。学校における部やサークルなどの課外活動の時間については、状況は変わっていないという認識が最多の約4割を占めるとともに、これまでと同様でよいという回答が過半数を占めた。その他、子どもたちの自然遊びについては、学校教員の約4割が場所は多くあると回答しながらも、約3分の2は時間が少ないと回答し、約8割が遊びの種類が減少し、約7割が異年齢による遊びが減少していると回答した。東京大学樹芸研究所が実施している森林体験については、約8割は参加経験がなかったが、約8割の教員は機会があれば参加してみたいと回答した。

**3. 環境認識と森林体験への志向** 図-2は学校教員の環境認識と森林体験プログラムへの参加意向との関係を整理し図化したものである。見ると、南伊豆町の学校教員のほとんどが地域の自然環境に対して関心があると回答しているが、中でもかなり関心がある回答者は肯定的な参加意向が増加していることがうかがえる。一方、危機感に関わる環境認識や役割感・責任感に関わる環境認識では明確な関係を把握することはできなかった。

**4. 森林体験への期待など** 東京大学が実施する森林体験プログラムに対しては47人が機会があれば参加してみたいと回答しているが、そのうち23人は個人的に、20人は授業の一環として参加してみたいと回答した。また、期待することとして記述された自由回答の中には、樹芸研究所が森林を専門領域であることを反映して「樹木」や「森林」に関する言葉が最も多く18件回答され、次いで、「南伊豆」と「(自然)遊び」(ともに13件)が多く回答された。一方、回答者のうち6人は森林体験プログラムについてあまり参加したいと思わないと回答しており、その理由としては時間が無いこと(3件)、PRが足りないこと(3件)、内容が難しそうであること(1件)が回答された。

#### IV 考察

以上、本研究では小中学校における学校教員の環境認

識と森林体験への志向について把握、整理し、その関係性を明らかにした。結果をふまえ、森林教育の観点から以下の3点について考察する。

一つは、学校教育における森林教育の展開可能性についてである。結果から、多くの学校教員は地域の自然環境に対して関心や危機感、役割感・責任感を持つだけでなく、学校教育の中で自然学習の時間を増やしたいと思っていることから、カリキュラムの中で自然資源の一形態である森林を括りとした学習を展開できると考えられる。

二つ目は、地域連携の中で学校教育を支援していくためには、地域の自然環境に対する意識の共有が欠かせないということである。本研究の結果に見られたように、地域の自然環境に対する関心が高い学校教員は、森林体験プログラムに対してより積極的な参加意向を持っており、地域の環境に対する認識を深め、共有していくことの重要性が示唆された。

三つ目は、森林を専門領域とする教育研究機関が初等中等教育を中心とする学校を支援できる可能性についてである。学校教員の約8割は大学が実施する森林教育プログラムへの参加経験が無かったが、約8割が今後参加してみたいと回答していた。しかし、時間が無い(確保できない)ことやPR不足などの回答が見られたことから、可能性だけでなく、輸送手段や広報のあり方について検討することなど、学校への支援にむけた課題も明らかとなった。

**謝辞** 最後に、本研究を実施するにあたり南伊豆町の教育委員会および小中学校に多大なご支援とご協力をいただいた。特に、教員のみなさまには調査の意図を汲み取っていただき忙しい中アンケート調査票に回答していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

#### 引用文献

- (1) 関隆晴ほか(2005) 小学校の森林体験学習支援を通じた大阪教育大学の社会貢献について. 大阪教育大学紀要第V部門. 54(1), 195~202.
- (2) 南伊豆町(2008) 南伊豆町過疎地域自立促進計画(平成17~21年度)(一部改正版). 南伊豆町, 43pp.
- (3) 以下の文献を参考にした。広瀬幸雄(1994) 環境配慮的行動の規定因について. 社会心理学研究. 10(1), 44~55.



図-1. 子どもの遊び

表-1. 回答者の属性

属性	人	割合
年齢	20代	7 12%
	30代	14 25%
	40代	19 33%
	50代	16 28%
性	男	31 54%
	女	25 44%
担当学年	小1	4 7%
	小2	5 9%
	小3	6 11%
	小4	6 11%
	小5	5 9%
	小6	3 5%
	中1	6 11%
	中2	10 18%
	中3	8 14%

注) 有効回答数=57

項目の合計と有効回答数の差は無回答

表-2. 回答者の環境認識および森林体験への志向

環境認識	人	割合	環境認識および森林体験への志向	人	割合				
南伊豆町の 自然環境への 意識	関心	かなり関心がある	21	37%	子どもたち の自然遊び	多いと思う	3	5%	
		やや関心がある	34	60%		時間	ふつう	15	26%
		あまり関心がない	1	2%		少ないと思う	36	63%	
		全く関心がない	0	0%		場所	多いと思う	22	39%
	危機感	かなり荒れていると思う	3	5%			ふつう	13	23%
		やや荒れていると思う	34	60%			少ないと思う	15	26%
		あまり荒れていると思わない	17	30%		種類	増えていると思う	0	0%
		全く荒れていると思わない	2	4%			変わらない	5	9%
役割感 責任感	かなりあると思う	15	26%	減っていると思う		48	84%		
	ややあると思う	33	58%	異年齢 の交流		増えていると思う	4	7%	
	あまりないと思う	4	7%			変わらない	8	14%	
学校における 地域の自然の 学習時間	全くないと思う	1	2%	減っていると思う		40	70%		
	増やしたい	増やしたい	27	47%	経験	あり	7	12%	
		このままでよい	17	30%		なし	47	82%	
		減らしたい	0	0%	樹芸研究所 の森林体験 プログラム への参加	必ず参加してみたい	0	0%	
時間のことはよく分からない		12	21%	機会があれば参加してみたい		47	82%		
変化の 状況	長くなってきている	7	12%	意向		あまり参加したいとは思わない	6	11%	
	変わらない	22	39%		参加したいと思わない	0	0%		
	短くなってきている	15	26%						
学校における 部やサークル などの課外活 動の時間	今後の 時間	時間をより多くしたい	10	18%					
		これまでと同様でよい	30	53%					
		時間をより少なくしたい	5	9%					

注) 有効回答数=57

項目の合計と有効回答数の差は無回答

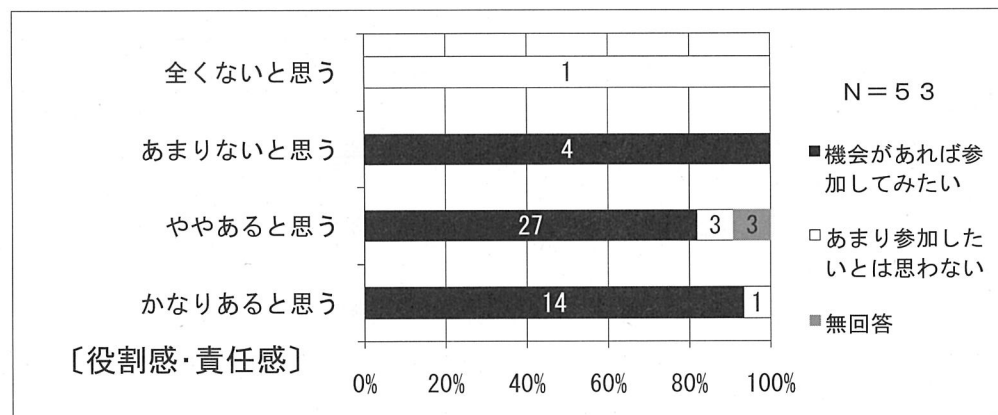
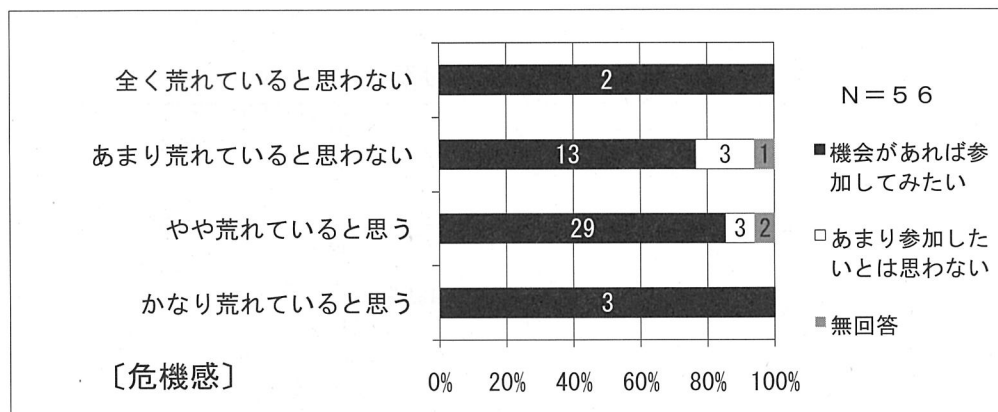
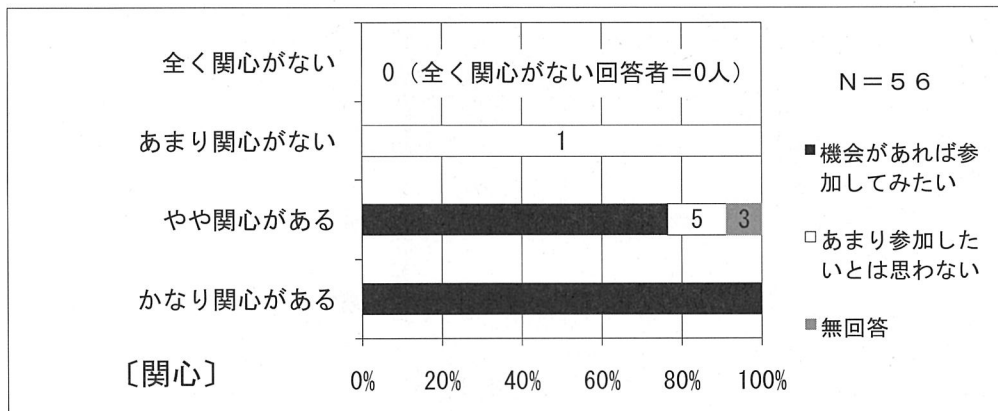


図-2. 環境認識と森林体験プログラムへの参加意向  
(上：関心，中：危機感，下：役割感，責任感)